

CON-TECH

まちづくり技術センターだより

22号

JAN.2005

CON-TECH ひょうご

事業レポート

住民の熱意が実を結んだ

快適で安全なわがまちの復興



阪神・淡路大震災10周年記念号

阪神・淡路大震災から10年を迎え復興した三宮周辺のまちなみ

CON-TECHひょうご 第22号 2005年(平成17年)1月4日発行(年3回発行) 第8巻第1号 通巻22号
 発行人 財団法人兵庫県まちづくり技術センター TEL:078-367-1230 神戸市中央区栄町通6-1-21(神明ビル)
 TEL:078-367-1230 FAX:078-367-1232 編集協力 商工印刷



22

土のはなし③

皆さんは地震報道の時に「液状化現象」という言葉を耳にすることがあると思います。1995年1月17日に発生した兵庫県南部地震においても、多くの箇所で液状化現象による被害が生じました。今回は地盤の液状化について紹介していきます。

前回の「土のはなし②」で紹介したように、土は、間隙が少なく土粒子が接近している状態が、土粒子相互の付着力が増し強度が高まります。

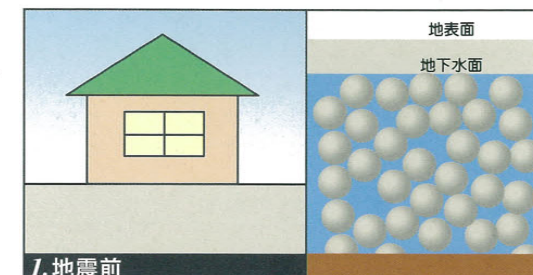
液状化現象は、一般的に小石や礫等の粒子が大きい地盤や粘土など土粒子の細かい地盤では発生しにくく、土粒子の大きさが中間の砂地盤で発生しやすいと考えられています。

通常土粒子が互いにかみ合っているため土粒子もその間隙水も安定しています。【図1】

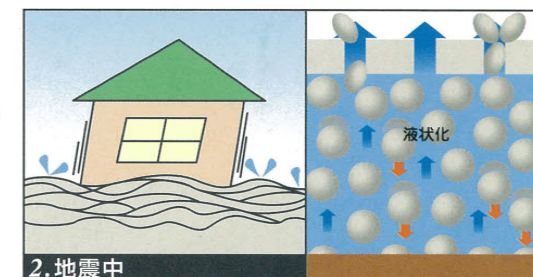
しかし、地震による強い揺れが加わると、土粒子の隙間が変形し間隙水の圧力が高くなります。その圧力が土粒子のかみ合いの力を超えると、土粒子は水中に浮いた状態になります。この状態が液状化です。地盤が液状化し、圧力が高くなった間隙水は、行き場を求めて地表面に移動し、その際土砂といっしょに泥水となって地表面に噴出します。【図2】

泥水が地表面に吹き出した分だけ、地盤は沈下することになります。【図3】

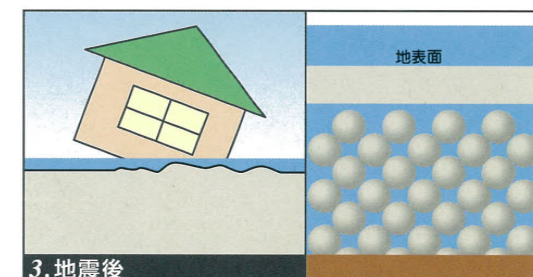
阪神・淡路大震災では、臨海部を中心にかつてない規模で液状化が発生し、道路・下水・建物等が大きな被害を受けました。



【図1】



【図2】



【図3】



豆知識クイズ Quiz

問題 軟弱地盤対策工法で液状化防止対策として有効な工法を一つ選んでください。

- ① サンドドレーン工法
- ② 深層混合処理工法
- ③ 置換工法
- ④ サンドコンパクション工法

答え: 当センターホームページに掲載しています。



財団法人兵庫県まちづくり技術センター
 Hyogo Construction Technology Center for Regional Development

〒650-0023 神戸市中央区栄町通6-1-21(神明ビル)

TEL:078-367-1230

FAX:078-367-1232

E-mail: info@hyogo-ctc.or.jp

URL: http://www.hyogo-ctc.or.jp

6階 総務部・まちづくりセンター

5階 企画部・建設技術部・都市整備部

4階 CALS研修室

阪神事務所 〒662-0857 西宮市中前田町1-25

播磨事務所 〒670-0965 姫路市東延末5-83

但馬事務所 〒668-0055 豊岡市昭和町2-56

丹波事務所 〒669-3309 丹波市柏原町柏原上中町東側280-1

淡路事務所 〒656-0022 洲本市海岸通1-11-1

TEL:0798-34-2275 FAX:0798-34-2285

TEL:0792-81-3377 FAX:0792-81-3388

TEL:0796-29-3031 FAX:0796-29-3073

TEL:0795-73-3750 FAX:0795-73-3660

TEL:0799-25-5150 FAX:0799-25-5170

編集後記

本号のコンテックは発行が震災10周年にあたることから、4頁の増刷を行った震災記念号とさせて頂きました。

本誌の発行にあたりましては、震災当時を振り返って頂く等、多大なご協力をいただきました皆様に深く感謝いたします。今後ともよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、新潟県中越地震・台風災害で被害に遭われた方々の早期復旧・復興を心からお祈り申し上げます。

写真提供

(人と防災未来センター・神戸市・共同通信社・神戸新聞社)

復興10年のあゆみ

平成7年1月17日午前5時46分 兵庫県南部地震発生／兵庫県災害対策本部設置

平成7年

- 1月 電気の復旧完了
- 2月 災害名を「阪神・淡路大震災」とすることを閣議決定
神戸市営地下鉄完全復旧
- 3月 兵庫県阪神・淡路大震災復興本部の設置
緊急復興事業の都市計画決定
- 4月 J R東海道本線、山陽新幹線完全復旧
ガス、水道復旧完了
- 6月 阪急電鉄、山陽電鉄、神戸電鉄、阪神電鉄完全復旧
- 7月 中国自動車道、名神高速道路完全復旧
ポートライナー完全復旧
阪神・淡路震災復興計画（ひょうごフェニックス計画）策定
- 8月 応急仮設住宅48,300戸、すべて完成
- 9月 阪神高速道路湾岸線完全復旧
- 11月 緊急インフラ整備3か年計画を公表
- 12月 第1回神戸ルミナリエ開幕

平成8年

- 4月 （財）兵庫県建設技術センター誕生
- 7月 国道2号完全復旧
- 9月 阪神高速道路神戸線完全復旧

平成9年

- 5月 神戸港の復興宣言
- 7月 山陽自動車道全線開通
- 12月 （財）阪神・淡路大震災記念協会を設立

平成10年

- 3月 神戸東部新都心、西宮浜地区、南芦屋浜北部地区が街びらき
- 4月 明石海峡大橋開通
北淡町震災記念公園・野島断層保存館オープン

平成11年

- 3月 西播磨広域防災拠点が完成
- 5月 神戸国際会館の完成（再建）

平成12年

- 1月 全ての仮設住宅入居世帯の恒久住宅への移転が完了
- 3月 淡路花博ジャパンフローラ2000が開幕（～9月）
- 8月 兵庫県災害対策センター開設
- 11月 阪神・淡路震災復興計画後期5か年推進プログラムを策定

平成13年

- 1月 1.17ひょうごメモリアルウォーク2001を実施
- 8月 但馬広域防災拠点が完成

平成14年

- 4月 阪神・淡路大震災記念「人と防災未来センター」（防災未来館）開設
- 12月 阪神・淡路震災復興計画最終3か年推進プログラムを策定

平成15年

- 4月 （財）兵庫県まちづくり技術センター誕生
阪神・淡路大震災記念「人と防災未来センター」（ひと未来館）開設

平成16年

- 4月 阪神・淡路大震災10周年記念事業開催（～平成18年3月）
兵庫県立広域防災センター開設

安全安心、元気な未来を

新年あけましておめでとうございます。

新しい世紀の幕開けから五年目の初春、今年は、阪神・淡路大震災から十年の節目を迎えます。今こそ、震災から力強く復興してきた兵庫の力を県内外に発揮しつつ、成熟の時代を切り拓いていく決意です。

まず第一に、安全安心対策を充実していかなければなりません。震災や風水害の経験と教訓を踏まえ、人々の生活の基盤である安全・安心の確保に万全を期し、治山治水の計画的推進や、自助・共助・公助による総合的な住宅再建共済制度の実現等を図ります。食の安全や健康対策も欠かせません。

第二に、「ひょうごの元気」の創出です。

地域教育の充実等による「人の元気」、経済・雇用の再生等による「地域の元気」、コミュニティ対策の展開等による「社会の元気」という三つの元気で、「元気なひょうご」づくりを進めます。

第三に、分権改革の推進です。

三位一体の改革の進展により、自己責任・自己決定に基づく、自由度の高い地方行政が実現に向かいつつある流れを確かなものとし、分権社会を実現していかなければなりません。日本の将来がかかっています。

元気と安心のうえに、参画と協働で、個性と多様性に満ちたふるさと兵庫の豊かな未来をめざします。

故郷の 明るさめざす 願いこそ

豊かな未来 つくる基いそ



兵庫県知事

井戸敏三

新年のごあいさつ

新年あけましておめでとうございます。

平素は、兵庫県まちづくり技術センターの事業の推進に格別のご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、昨年は、記録的な数の台風が日本列島に上陸し、本県を始め、全国各地に河川の氾濫や土砂災害による大きな被害を引き起こすとともに、十月には新潟県中越地震が発生するなど、あらためて自然の脅威に驚かされ、安全で安心のできる県土づくりの大切さを認識させられました。

本年は、あの阪神・淡路大震災から十年の節目の年にあたります。この時間の流れの中で、多くの人たちの努力によって、都市とその暮らしが復興してきたことは誠に感慨深いものがあります。

まちづくり技術センターでは、県及び市町に対する公共事業への総合的な支援やまちづくり支援を積極的に推進するとともに、IT化の推進や新技術・新工法に関する情報発信など新しい取り組みも進めてまいりました。更に、膨大なストックを抱える公共施設の適切な維持管理をめざして、アセットマネジメントに関する研究を始めています。

今後とも、技術の向上を図り、安全で安心のできる県土づくりをめざしながら、より質の高い社会基盤整備に貢献できるよう努めてまいりますので、引き続き皆様のご指導を賜りますとともに、より一層ご活用いただきま



財団法人 兵庫県まちづくり技術センター
理事長 山口 昇

住民の熱意が実を結んだ――

快適で安全なわがまちの復興

芦屋西部第二地区震災復興土地区画整理事業 兵庫県芦屋市

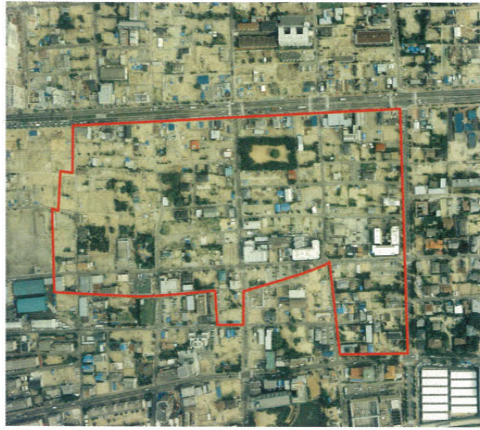
阪神・淡路大震災によって甚大な被害を受けた芦屋市西部の津知町、川西町などの地域が、10年の歳月を経て、閑静な住宅街としてのたたずまいを取り戻しつつあります。地域の住民たちが主となって、芦屋市と共に話し合いを重ねながら、わがまち「復興へと一歩ずつ歩んできました。災害時には避難路となるコミュニティ道路や、住民の憩いの場であり、防災機能も備えた公園を持つまち、おだやかに安心して暮らせるまちとして、今、新しい一歩を踏み出しています。

震災からの復興を

まち再興協議会の設立

落ち着いた家並みの中を走る緑豊かな道路。公園には、ヒメリンゴの木や井戸の手こぎポンプが見られ、子どもたちの声があふれています。なごやかな情景がひろがる芦屋市西部地区ですが、ここまでの道のりは長く険しいものでした。

六甲山系を望むこの地域は、北側に国道2号が通り、一部に商業施設もありまし



震災後の状況（倒壊家屋が撤去され更地が広がっています）

たが、落ち着いた古くからの住宅地で、そこには、人の心が通い合う地域コミュニティが形成されており、地域活動も活発に行われていました。

平成7年1月17日の阪神・淡路大震災によって、その風景が一変してしまいました。建物の90%余りが全半壊するという、市内でも最も大きな被害を受けたのです。



倒壊家屋でふさがれた道路

芦屋市は、早期復興を目指して、同年3月に都市計画決定を行いました。しかし、一度震災復興で土地区画整理事業が行われており、地元住民たちからは、その見直しを求める声があがり、「芦屋西部地区住民の会」が設立され、事業の白紙撤回を望む請願書が、市議会に提出されました。

住民と芦屋市は、連日連夜話し合いを続けましたが、住民全体の意見がなかなかまとまらず、復興へと動き出せませんでした。

そこで、住民全体を代表する新たな組織づくりの必要性が高まり、平成8年3

月17日、「芦屋西部地区まち再興協議会」が設立されました。

同会事務局長の森圭一さんは「住民同士が分断してしまうことは何としても避けたい。それに一日でも早く、みんなが戻ってこられるまちにしたいという思いが強かったですね」と、当時をふり返ります。

「まちづくり協議会」ではなく、「まち再興協議会」とは、もともとあった「わがまち」を「再興」するのだという住民の熱い思いが込められています。



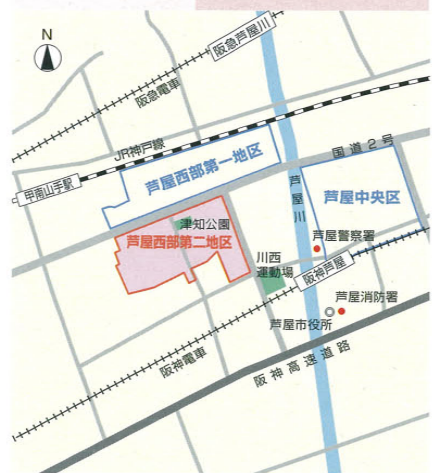
協議会事務局長 森圭一さん

住民たちが「まち再興計画案」を作成

同協議会では、住民たちの手による「芦屋西部地区まち再興計画案」の作成を目指して、専門家や弁護士らアドバイザーと、オブザーバーとしての芦屋市と共に、何



芦屋西部地区まち再興計画（案）



の住民が参加し、共にまち再興のための道を探したのです。そして、再び町別ブロック会やアンケート調査が行われ、最終的に「芦屋西部地区まち再興計画案」が取りまとめられました。

同協議会幹事の



協議会幹事 西隆弘さん

西隆弘さんは「最初の2年間で一番苦しかったですね。私たち幹事が得た情報を、住民みなさんにいかに伝えていくかがむずかしかった」と、情報の共有化の大切さを痛感したと言います。

最終案が住民投票によって6割の賛同を得たことで、同年8月、正式に住民の声として芦屋市へ提出され、これをもとに事業計画が策定されることになりました。こうして、毎週深夜まで話し合いが続けられた約2年間の取り組みが、大きく実を結び始めました。

道路や公園を考える

「まちづくり提案」も作成

平成10年12月に、同協議会が第1回ワークショップを開催し、その後ワークショップや見学会を重ね、次世代へと受



ワークショップの状況

け継がれていくまちを、より良いまちにしよう、道路と公園、まちのルールづくりなどについて具体的に提案していくことにしました。

平成11年2月に



公園（ポケットパーク）

画編を、それぞれ芦屋市に提出しました。公園はもともあつた津知公園を拡張整備するほか、ポケットパーク的なものが6カ所作られました。住民の声が反映されて、それぞれの公園には、必ず、シンボルツリーと実のなる木、そして、防災用の井戸があり、手こぎポンプが設置されています。

完成した今では、どの公園も子どもたちが遊び、年配の人たちがおしゃべりを楽しみ、サラリーマンがひと休みしていく。そんな住民みんなの憩いの場となっているようです。

また、公園周辺の住民たちが定期的に清掃を行い、安心して集える美しい公園として管理しています。



協議会副代表 山下欣也さん

「今だけを考えるのではなく、長い目で

見て、子孫に対して少しでもいいまちを残していこうと話し合いました」と、同協議会副代表の山下欣也さん。地域の中を通るコミュニティ道路の両側には豊かな緑が配され、歳月と共に木々の成長も楽しみます。



整備されたコミュニティ道路

次世代に誇れるように、

まちを守り、育てていく

土地区画整理事業はまもなく収束を迎えますが、今後は、まちそのものを育てていく方向へと進み始めています。

同協議会代表の稲本實さんは「協議会は、住民みんなの力を集めたものだったと思っています。だからこそ、ここまでこれました。ただ、被災地に対する土地区画整理事業というものに、もう少し柔軟性があっても良かったのでは」という思いも残っています。まちは今、ようやく芽が出始めたところですから、これを大切に、住民みんなが育てていかなければ。それが住民としての私たちのつとめだと思っています」と、話し



協議会代表 稲本實さん

山中健芦屋市長は「まち再興協議会が

住民のみなさんの視点に立って、精力的に活動に取り組み、地元をまとめていただいたことが、復興へ向けての大きな力となったものと実感しております。今後も、より緑の多い魅力的なまちとなるよう、今までに蓄積されたノウハウを生かし、地域づくりを進めていきたいと思います」と、その活動を振り返りながら今後の期待も話されます。

当初は、住民の反対もありましたが、同協議会が住民全体の思いをまとめ、市と協働で、まちの復興へと道を切り拓いてきました。わがまちを愛する住民たちの思いが、これからまちを成熟させていくことでしょう。



山中健 芦屋市長



まちの再興が進んだ芦屋西部地区の現況

当センターでは、本地区の都市計画決定図書・事業認可図書・換地設計・換地計画業務の受託をはじめ、協議会へのアドバイザー派遣や活動支援を行ってきました。

道路

陥没した大開通、
地下には神戸高速鉄道大開駅



現在

高速道路

約600mにわたり横倒しになった
阪神高速道路



現在

— 復旧した土木施設 —

港湾

岸壁が崩壊した神戸中突堤



現在

河川

倒壊した新湊川の会下山トンネル吐口部



現在

「1.17は忘れない」

淡路島北部を震源として発生した都市直下型の大地震は、一瞬にして6400人を超える尊い命を奪いました。また、道路・鉄道・港湾施設等多くの都市基盤施設が崩壊し、その被害総額は、約10兆円にもなりました。

そのような状況から、平成8年9月末には阪神高速道路が全線開通する等、関係者の懸命の努力と多くの支援によって復旧作業が進み、平成12年3月末には全ての仮設住宅が撤去されました。

平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災からまもなく10年を迎えます。当センターでも、これまでの復興の歩みを振り返るとともに、大震災の経験と教訓を生かし、参画と協働による安全で安心な社会づくりを支援していきたいと考えております。

1995年1月17日(火)午前5時46分

マグニチュード7.3

1995年兵庫県南部地震発生

震央地名……淡路島(北緯34度36分、東経135度02分)

震源の深さ…16km

兵庫県内の被害状況(平成15年12月25日現在)

死者数 6,401

行方不明者数 3

負傷者数 40,092(重傷者10,494 軽傷者29,598)

家屋被害(全壊・全焼・半壊・半焼)

世帯数/448,930

棟数/248,412

注:全国の死者数6,433

当時を振り返って



(財)福島県建設技術センター
会津支所
荒井 哲夫 様

“日々奮闘”

『CON-TECHひょうご』をご覧の皆様こんにちは、わたしは八年前に福島県建設技術センターよりお世話になりました荒井です。

赴任当初は「だべした」から「そやさかい」と言葉の違いにとってもギャップが有り、また慣れないアクセントなど言葉のハンディを感じました。しかし、それらは兵庫県のセンターの方々や他県の派遣の方々と『夜の三宮レッスン』のおかげで何とか克服した様に覚えています。

業務は主に積算業務で微力ながら復興のお手伝いを行っていましたが、数量算出等で今なら当たり前前にパソコンで作業していますがその当初はロータスからエクセルへと変わった時期でエクセルを使えない自分はなまりの多い手書きで日々奮闘した覚えがあります。

また、打ち合せが夜になり、タクシーで夜の神戸港を眺めながらの移動などと、めったに経験の出来ない数々の良き思い出が今でも心に残っています。

本当に兵庫県の方々には心優しく接して頂いた事、心より感謝申し上げます。センターの益々のご繁栄をお祈りいたします。

最後に兵庫県と同じ震災で被害に遭われた新潟中越地方の方々の早期復旧・復興を心からお祈り申し上げます。

派遣先／兵庫県建設技術センター 建設技術部橋梁設計課
平成8年8月1日～平成9年3月31日



(財)山形県建設技術センター
業務第1課 道路計画第2係
柴崎 文夫 様

“今、想うこと”

私が兵庫県での平成9年度1年間の派遣を終えてから、まもなく7年が経とうとしている。兵庫県への派遣では2年に及ぶ方がおられたが、建設技術センター（現まちづくり技術センター）への派遣では長かったようです。主に担当していたのが河川災害復旧助成事業で、震災後2年ほど経過し、方針がほぼ固まっており、手探りでやらなければならない状態ではなかった。そのため、忙しかったという思いはあったが、被災された方、先陣をきって計画された方の苦労とは比較になりませんでした。

震災復興という目標のもとに、地権者・施工者・関係各機関に多大な協力を頂いた。また、個人的にも色々なことに接することができ、貴重な体験をさせて頂いた。派遣中いろいろな方より心遣いを頂き、大過なくすごせたことに感謝を申し上げたい。

最後に、阪神大震災での経験を今後に繋げるとともに、施設面だけでなく、精神面までの復興を、心よりお祈りいたします。

派遣先／兵庫県建設技術センター 建設技術部道路設計課
平成9年4月1日～平成10年3月31日

住民による復興まちづくりへの支援

まちづくりセンターは、住民による復興まちづくり活動に対して、まちづくり専門家の派遣やまちづくり協議会等の活動費助成などの支援を行ってきました。

これらの支援により、復興まちづくりとして災害に強いまちづくり計画（住環境整備事業）や建物再建等に当たってのルールづくり（地区計画等）が行われ、地区の復興が進められました。〔約300地区〕

被災マンション建替えに当たっては、専門家派遣等を行い、

建替え計画の策定、権利者の合意形成等の支援を行いました。〔約50地区〕

その他、接道不良・狭小宅地等のため単独再建が困難な住宅の共同化・協調化による再建についてアドバイスや計画策定の支援を行いました。〔約280地区〕

被災地では多くの地区で住民主体による復興まちづくりが行われましたが、これを契機としてこの10年の間に住民主体のまちづくりが県下各地に広がりました。

当センター内にあるまちづくりセンターが行ってきた復興支援事業を紹介します。



被災状況



竣工式



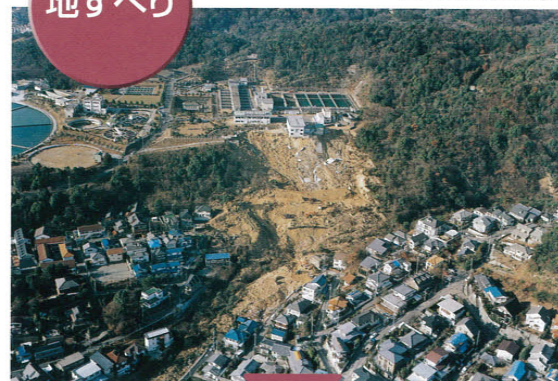
建替え後

支援事例

（被災マンション建替え）
写真：レジデンス芦屋くすのき
（旧芦屋くすのき住宅）

地すべり

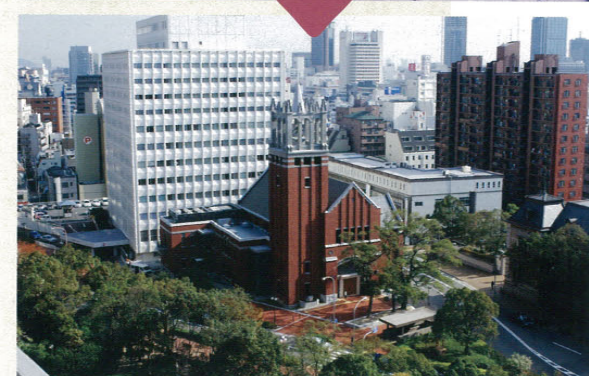
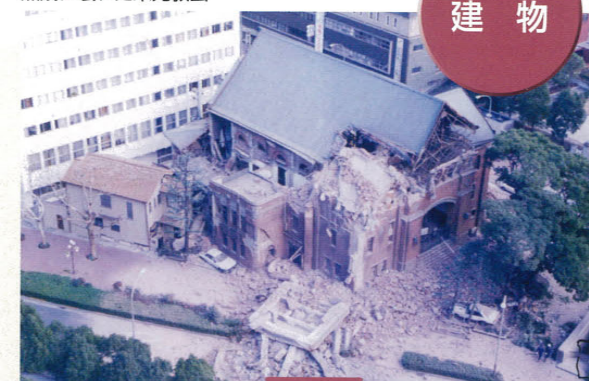
西宮市仁川百合野町



現在

建物

無残に壊れた栄光教会



現在

— 復興した街のすがた —

建物

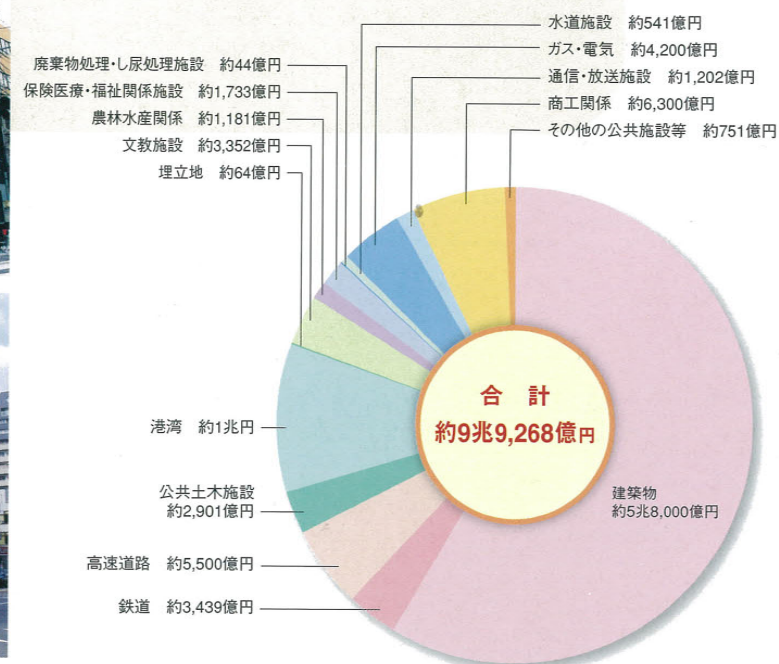
全壊した民間ビル



現在

被害総額と内訳

被害総額（平成7（1995）年4月5日推計）





震災10年を迎えて 東灘芦屋線連絡橋ケーソン工事

■阪神南県民局 尼崎土木事務所道路保全課 西原 健二（（財）兵庫県まちづくり技術センターより派遣）

阪神・淡路大震災から10年目を迎え、若干の格差は見られますが、被災地域の復興は着実に進んでいると感じさせられます。この10年を振り返り、平成10年度から平成12年度にかけて経験した震災復興事業の現場監理業務を紹介します。

災害に強いまちの復興へ

平成7年1月に発生した阪神淡路大震災は、阪神間に多大な損失を与え、中でも橋梁等の道路構造物が大きな被害を受けました。

阪神地域臨海部では交通渋滞が発生し、深江浜・南芦屋浜などの埋立地は、連絡道路が遮断され孤立状態となりました。この震災の教訓を生かし、埋立地の孤立化を防止すると共に緊急活動に対応できる災害に強いまちを創るため、深江浜（神戸市東灘区深江浜）と南芦屋浜（芦屋市陽光町）を結ぶ県道東灘芦屋線連絡橋が、兵庫県・神戸市共同の震災復興事業として計画されました。

当センター阪神事業所では、東灘芦屋線連絡橋の海上部分の橋梁積算業務と橋脚（ニューマチックケーソン2基）の現場監理業務を受託しました。

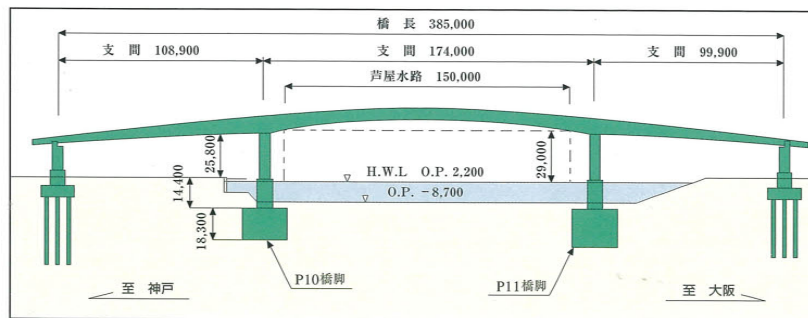
震災前後9年間勤務していた建設会社を退職し、当センターに採用になった私の初めての現場監理業務が、この東灘芦屋線連絡橋のケーソン工事でした。



完成した連絡橋

ニューマチックケーソンによる施工

現場は神戸港の航路付近で水深



も深いため、工場製作された鋼殻ケーソンを現地に据え付け、ニューマチックケーソン工法にて施工し、ケーソン本体にRC橋脚を築立するピア式ケーソン方式が採用されました。

ニューマチックケーソン工法は通常、ケーソンの函内で有人掘削し、沈下させる工法が一般的ですが、水深が大きくなると高気圧で高温多湿といった過酷な作業環境となり、工程も長期化し経済性が低下するため、この工事では地上遠隔操作の無人掘削で施工されました。

無人掘削とは、現場事務所内に設けられたモニターを見ながら遠隔操作盤のレバーを動かし掘削するもので、テレビゲームで遊んでいるようにしか見え、3Kのイメージを払拭し、土木工事の新世紀幕開けを感じさせられました。

このケーソンは阪神高速道路湾岸線と非常に近接していたため、施工に先立ち有限要素法による既設橋脚への影響解析を行い安全性



遠隔操作盤

を確認し、既設橋脚及び周辺地盤の挙動を24時間リアルタイムに

動態観測しながら施工を進めるなど、高度な情報化で施工管理しました。

また、高性能コンクリートの先端技術であったブリージング抑止コンクリートの使用によるレイタンス処理作業の省略や水和熱によるクラック発生低減のため、低発熱コンクリートを使用するなどの貴重な経験もさせていただきました。

最後に

現在、東灘芦屋線連絡橋は上部工が完成し、平成16年12月18日より供用されています。神戸から尼崎への新たな都市の動脈として使用されていくことでしょう。

振り返ってみると、この現場経験がその後の現場監理業務に多大の影響を与え、新技術が大好きになり、積極的に検討する事になりました。しかし、新しいものばかり採用していると、時に痛みに遭うという事は、その後に知ることになりました。



災害対策センター地下連絡通路 建設工事の思い出

■県土整備部まちづくり局土地対策室 松村 俊宏

私は、平成8年度から平成11年度までの4年間、（財）兵庫県建設技術センターに在職しており、そのほとんどの期間を地下連絡通路建設工事に関わっていましたので、特に愛着のある工事の一つです。今回、阪神・淡路大震災後10年にあたり、（財）兵庫県まちづくり技術センターが携わった震災関連工事ということで当時の地下連絡通路建設工事について経験談を依頼されましたので、頼りない記憶をたどりながら、当時の思い出として、寄稿させていただきます。

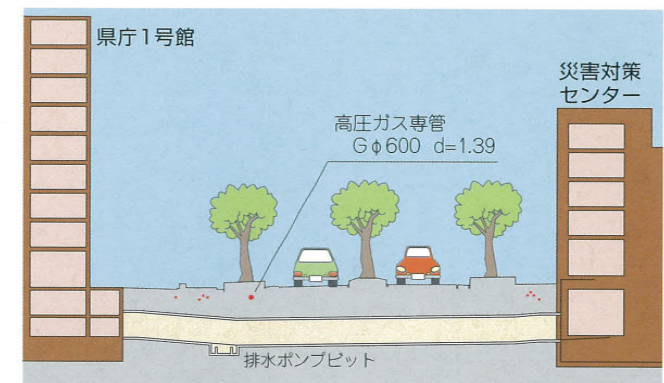
災害対策センター地下連絡通路は災害対策センターと県庁1号館を直結する延長52.7m、内空断面3.0m×3.0mのボックスカルバート構造で歩道部と通信設備等の共同溝部からなり、平成12年7月に完成し、平成12年8月から共用を開始しています。



現在の連絡通路の様子

多くの関係機関協議

平成9年7月に県の防災監から地下連絡通路整備事業の協力依頼を受け、道路管理者である神戸市と協議を開始したところ、地下連絡通路が建築物であり、道路占用許可を取得するには、兵庫県警、神戸市建設局・住宅局・消防局の各委員からなる神戸市アーケード等連絡協議会において各機関の意見が一致することが必要条件であることが判明しました。約30回の事前協議後、平成10年8月によりやく協議会の



●災害対策センター地下連絡通路

了解を経て、建築基準法第18条3項の規定による確認済証、道路占用許可等の各種許可を取得し、平成11年6月より本格的な工事に着手しました。

多くの現場条件を乗り越えて



開削工法による工事の様子

地下連絡通路工事の工期は約1年と非常に厳しく、φ600のガスパ管をはじめとする複数の埋設管への影響を考慮して、推進工法から開削工法に変更し、地元、神戸市、警察、タクシー協会、災害対策センター建築工事等と調整を繰り返しながら、昼夜作業で車線の切り替えを十数回繰り返した結果、無事、遅延するこ

震災復興日誌

センターが受託した震災復興関連事業について、工事に係わる様々な話題を当時の担当者から、思い出を含めて紹介します。

最後に

現在、私は県庁に勤務していますが、仕事に行き詰まった時など、現場監理者の特権として、地下連絡通路本来の目的などそっこのけで、現場での出来事やセンター内の部課を超えた協議資料・積算図書の作成、万に備えた保険の加入、理事長室の夜間開放等の充実した応援体制や三宮の復興への貢献と称した夜のセンター職員意見交換会など当時の思い出しながら、地下連絡通路を歩いて気分転換を図っています。

